

---

# 空手紙

桜岩 瑞歌

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空手紙

### 【Zコード】

Z3753S

### 【作者名】

桜岩 瑞歌

### 【あらすじ】

誰でも上を見たら当たり前にある空を通して、人と人がつながつていいく。

そんな世界を、広げたくて。

遠くても気持ちは届く。かもしねない。

## 出でこは空を通じて（前書き）

海を隔てて愛し合つた恋人達がいた。

彼らはとても幸せな時間を共有し、突然、別れを告げた。

しかし彼らは、なお愛し合つていた。

海の向こうって言つと何かへン。同じ国なのにね。不思議だね。  
島国だから仕方ないんだけど。  
彼女はは遠くにいる彼を思い出して呟いた。  
聞く者はいない。

少し冷たくなつた9月の空に消えた声。  
夏に消えた記憶をなぞつた声だった。

はじまりのことは覚えていない。

ただブログに載せた写真が気にいつて、どちらともなくアドレスを  
交換した。

彼らは互いのメールアドレスしか知らなかつた。  
しかしそれで充分だつた。

幸せだつた。

確かに好きだつた。

でも、今は過去形。背を向けて、歩き出すことを選んだ。

拝啓。

れいくん、お元気ですか？

あなたの道を進めていますか？

わたしは今から、少しあなとの記憶の中を旅しあつと想います。

いいですか？

・・・いいよね、少しくらい。

鍵が錆びて記憶の宝箱開かなくなる前に。

## 突然の提案

始めのメールはただの自己紹介だった。

—レイです( ^ - ^ \* )

交換ありがとうございます！

なんて呼ばばいい？

Isatomiです。

こちらこそ。

サトでいいです。本名交換しますか？

返事は速い。

—俺はレイでいいよ。

つか、本名だから！

さとみも本名だろ？

—本名言つた覚えないですけど・・・

—いーからいーから  
よろしくなー！

勝手に締めくくられたっけ。

わたしの名前、みさとですけど。名前入れ替えただけですけど。  
まあいいや。信じないし。

そんな始まりだった。

彼はいつも突然だ。

— コーヒーと紅茶ならどっちが好き？

俺は . . . 紅茶に入れるホットミルク派です。

というメールや、

— パプリカは黄色の方が美味しい！

などと、

実際にどうでもいい個人情報を勝手にしゃべる。  
それにはへえ、などと返していただけれど、そういうふた何気ないメー  
ルでわかつた共通趣味がいくつか見つかった。

一番盛り上がったのは部活の話だ。

彼はサッカー少年だった。そしてわたしはサッカー観戦が大好きだ  
った。

ゲームを見るのは楽しい。ハラハラする。  
でも、ルールはよくわからない。

だから、テレビで試合を見ているとき、大概彼も同じ試合を見てい  
たので（わたしが日本代表戦ばかり観ていたから）、解説を求めて  
メールしたりした。

彼が審判の資格を取得いたためである。

—今解説が言つてた、ハツトトロックって何？

—同じヒトが3得点あるコト。まあ、わざわざの3回。

—ホントだ。じゃあ、オフサイドは？なんとなくはわかるけど見極められない。

—ソレは慣れの問題じゃね？！（笑）

—ナラウかも（笑）

そんな何気ない会話だった。

はやくから始めた受験勉強の息抜きに楽しんでいた。

そんな会話の延長線のよつて、つい、彼は言ったのだ。

—ねえ、俺じり付き合つてみない？

そう。二つものように、それは突然受信された。

## お願ひします

付き合ひ?.

付き合ひって何だ?

会つたこともないのに。

随分どこ無沙汰な響きだった。

恋愛経験がないわけではない、異性と付き合ひたこともある。  
けれど、全て中学レベルで、高校に入ってからは聞かない響きだった。

た。

最後のお付き合いは2年前だったか。

気持ちのついていかなかつた自分からフツてしまつた。

ひどい終わり方だった。

もう一度と誰かと付き合つたりしたくない。

そつ思ひ程に。

でも、でも、でも。

あれつて好きになつてからだよね?

レイくんに好感は抱いているものの、付き合ひのに必要な恋愛感情  
ではないよ。

どうすればいいの。

ー付き合ひでもアレだよ、メル彼になるだけだよ。

追い撃ちのようになつてメールが届く。

ーメル友と何が違うの?

返信してみた。

ーちょっと込み入った恋愛バナシもさせていただきマス。

ラブラブのメール送つてあげるよ(笑)

そういうものなのか。

ーどの程度?

ー セー ゆこと聞くなよな(汗) 恥ずかしいだろお ・・

聞いてはいけなかつたらしい。

ー ね? ビリ?

つまり、今までとかわりなく話すだけ。でも。

ー 好きなわけじゃないのに?

ー さとみはね? 僕はさとみ結構好きだけじね。

さうつと言つてくれるではないか。

ー 顔も知らないのに?

ー 今度[写メ送るよ。

何を言つても無駄だと思った。しかし根本の問題は好きだとか、それ以前に。  
みさとに人を信じる気持ちがない。

もう気持ちなんか信じない、目に見えないし。  
冷めてると思われるだろうか？

—好きになれなくてモ？

—俺がさせてやる。

つつつても付き合ひたりしたことないからよくわかんないナゾ。

ダメ？

最初はお試しでもいいけど。

そういうのもアリなのか。確かに、前の彼もお試しでいいといってダラダラしていた。

そしてフツた。

同じようにはしたくない。例え彼が状況を変える気でいても。あれこれと考えを巡らす。

そして気がついた。

わたしは人を信じきっていない。

いつも裏切られてきて、期待するのも嫌になってしまった。  
自分が傷つきたくないだけだ。

わかつてはいても、歩み寄つて離されてしまつことが、恐ろしくて仕方ない。

それを伝えなければ。

—わたしはあなたをまだそれ程信用できません。

メールだけの間柄だし、怖いから。

かなりぼかした言い方をした。

返信に間があく。

ーそっか！

そうだよな。

会つたことないのに信用できんよな。

「めん。俺が悪いわ。

そこで一度切れていた。

間を空けず次のメールが届く。

ー今までと変わんなくていいから。

メールしよ。そんだけ。 特別じゃないし。

俺がちょっとだけ変えるからわ。嫌なら言つてよ。

ただ、何かあつたときに、すぐに話したいと思える人になりたい。

ダメ？

彼はポジティブだった。

そして優しく、近付いてほしい、と言つてきていた。

そういうことなら悪くないかも。付き合つつていつたつて所詮メールの関係だ。

それなら。

ーわかりました。よろしくお願ひします。

## 贈り物と、

それから2・3日は特に何も変わらなかつた。

今まで通りのメール、内容も深くない。

ゆで卵の固さとか、好きな色とかの話で、充分楽しく過ごす。

そんな日々に、それは、突然やつてきた。

レイの誕生日だ。

メールアドレスに入つていた数字が誕生日かと思って聞いて、数日後だと発覚したので慌てた。

メールで祝うくらいしかできないけれど。

ちょっと、何か違う色を加えたい。

しばらく考えて、わたしは彼が気に入っているという漫画のキャラクター（海賊マンガのヒゲをはやした剣士）のイラストを描いて送る事にした。

絵画を習つていたこともあって、絵は苦手じゃない。

それなりに納得したものを写真に撮つてメールする。

気にいるかな？

少しどキドキする。

恋してるみたい。あ、一応メール彼なんだつけ。

しかし、いつもは速い返信が、今日はなかなか来ない。気がつけば1時間以上経つていた。

もしかして、気に障るような下手をだつたかな。心配になつて送つた写真を見る。

ああ、ちょっと暗くなってるな。

実物で色にこだわったところ、『写つてないな。

迂闊にも『写真を確認せずに送ってしまった自分にむしゃくしゃして、  
布団の上を『転げ回る。

ぐるぐる、『ういり。

『ういりういりういり。

「あー・・・」

ひとしきり『転がつたところで、長く息を吐き出した。  
その時、携帯の振動する微かな音が聞こえた。  
がば、と起き上がって携帯を開く。  
予想通り、レイからだつた。

－俺のブログ見た？

へ？  
ブログ？なんで？

－見てない

－じゃあ見て

文字だけなのに、いつもより冷たい印象。  
怖いな。

恐る恐るパソコンを立ち上げ、お気に入り登録された『JRL』を開く。

「あつ」

トップページが変わっていた。

見覚えのあるイラストが画面にぱぱぱぱーに広がる。

タイトルは、

『HAPPY BIRTHDAY!! 僕!!』

吹き出した。

なんだソレは。

記事をみると、誕生日で何歳になつたという報告と、イラストをブログ友達に貰つてトップを飾ることにした、とこうものだった。

なんだ。

怒つたわけじやなかつたのか。

少しほつとして、、、でも。

ーかつてこのせてー・・・

わざとひらがなで返信した。

ーイヤだつた？（汗

今度の返信は速い。

ー・・・恥ずかしいから

ーいーじやんー上手いよ、すじぐ。

俺の絵は恥ずかしそうで見せられないけど（笑）

ーえー（笑）そう言わると見てみたい（笑）

一 勘弁してください・・・

今度は彼が萎れる番だった。

見せるだの見せないだの、じばりく問答が続いたあとだった。

一 今日は最高のプレゼントサンキューね！

レイから締めくくるメールが届く。

しかし、文章終わりに表示される、ENDの文字がない。  
まだ文章があるらしく、カチカチと下にスクロールしたところで、  
固まった。

一 これとみのこじもつと好きになつたやつたじやん

え？！あ？！うわっ？！

ナニコレッ死ぬほど恥ずかしい！――！

落ち着けワタシ。

一 応メル彼だ。

設定みたいなもののはずだ。これくらい・・・。

もう一度、チラッとメールを見る。

バタン。頭から机に落ちる。

完全に撃沈された。

頭から狼煙が上がりそうだった。

こんな風に変わっていくのか・・・。

みさとは、憂鬱なため息をついた。

## ちょっとした変化

結局、あの恥ずかしいメールには返信できず、「やむやもして寝てしまった。

そして今日、

学校に着いた時に何故か思いだし、頬をほのかに染めるハメになる。

だつて、だつて。

いきなりあんなの。

と思つたところで考え方直す。

わたしつつてそんなにウブだつたつけ？  
慣れてないつけ？

脳内検索をかける。

- ・・・うん、こういうタイプのひと、初体験かも。  
いわゆる元カレは、大変なヘタレだつた。  
付き合ひはじめてから知ることになるけれど、オタクで、  
付き合つていながら、二次元にしか興味がなかつたよつて思つ。  
気持ちを伝えられたことなんて、一度もなかつた。

だからだろうか？

はじめての感覚に、少し恐怖を覚える。

この人、どこまで入り込んでくるつもりだろう。

からかつてるわけじゃないかなあ？

恋愛慣れしてる人で、遊ばれてるんでないといいな。  
ネットならいくらでも嘘がつける。

年齢だけでなく、性別まで偽る人がいるように。

そもそも、彼が何故いきなり付き合おうなんて言い出したかも不明なのである。

特別な何かがあつた覚えもないし。

ふむ、と、みさとは腕組みをした。

いつか聞いてみる」とこじよつ。

「みさと、何考え込んでるのよ」

ややトゲッキみの顔を覗き込む長い髪の影が、視界を薄暗くする。

「綾乃つ。べ、別にい？」

「なあに、真面目に勉強してたわけ？」

田の前に広げられた参考書をつまみ上げて、顔をしかめた。

「わつけわかんない。ってか、理系つてゆう人種のが意味不明！」

そこままで言つた、とわたしは苦笑いを浮かべた。

「なんでわざわざ文系の学校で理系になるんだか。  
・・・でも、みさとは難関田指したいんだもんね。」

「うん」

わたしの高校は、私立の女子校だ。

大半が指定校で進学を決める文系重視の学校で、わたしのよつよつ、元気な  
ほぼ独学になるリスクを背負つて理系を選択する生徒は大変珍しい。  
確か、250人近くいる学年で、両手の指で数えるくらいしかいなかつた。

わたしは、その珍しいひとりである。

「理系だと、将来はがつたり働く女だね。カッコいい！  
なんか、みさとは田那様とか要らないって言つタイプみたい」

「えー、そう？」

「じゃあ、例えば、彼氏とか欲しい？」

「・・・こまはそういう欲しくもないな」

「ほひあー。」

綾乃が黄色い声をあげる。メル彼はいますけど、と、みさとは内心  
ツツコミをしておく。

やりたい仕事があるから理系にしたとか？

「ま、相方は将来の話だもんね。  
いつか考え変わるかもよ？  
まずは進路。

「うん・・・まあ」

「みやとは進路希望秘密主義だからなあ・・・むう」

「ふく、と頬を膨らませて綾乃が顔を近付けてくる。

「こまはいいけどさつ。

いつかはちやんと教えなさいよー応援しにくいんだから

「うん。でもまだ恥ずかしいから・・・。

もつけようとねつけたりと細々たら言つ。

それまで許して?」

「わかったわかった。綾乃、応援してるからねー!  
それで受かんなかつたら許さないんだから」

「はは・・・」

綾乃は、わしわしとみさとの髪を乱してから席に戻つた。

応援なんだか脅しなんだか。

そうこえは、レイつて進路だとか、どつなつてこるんだうつ。  
これもいつか聞いておかなくちゃな。  
お互に邪魔するよつではいけないし。

いつの間に、話題が彼に繋がつてこる。

そんな己の変化には気が付かず、思い立つたらすぐ行動するマイ  
ルールに従つてメモをとる。

みさとは、それを筆箱に差し入れて次の授業の準備をした。

## ちょっとした変化（後書き）

ようやく章の使い方がわかりました。o\_r\_z

## 天使の梯子

一日が終わるのはあつという間だ。

気が付いたら授業が終わっていて、帰りのバスに乗つて帰る。毎日それの繰り返し。

みさとは、窓際の席で頬杖をついて座つていた。

暇だなあ・・・。

バスの発車までまだ30分近くあつた。

「ド」がつくほど田舎の学校では、バスの本数が信じられないくらい少ない。

帰りは1時間おきに3本のチャンスのみだ。

みさとはぼんやりと空を眺めていた。

持つてきた本は読み切つてしまつたし、特にすることもない。暇だ。

ため息をついたその時、目の前に広がる入道雲を、大きな鳥が横切つた。

「あつ」

悠々と飛ぶ翼の広い大きな鳥。

すごい。絵になっている！

宮崎映画のワンシーンみたいだ。

見惚れていると、鳥が旋回してきたまた雲を横切った。

「これは、もしやシャッターチャンスをくれている?」

みさとは慌ててかばんからカメラを取り出すと、電源を入れて目の前で構えた。

もう一度戻つてぐるのを待つて、タイミングをはかる。

・・・今だ!

カシャ、といつ音がして、画面に写真が表示された。

「やった・・・」

つい、声が漏れる。

なかなかの傑作だった。

みさとの写真コレクションは、パソコンのデータを全て埋め込んでいがある。

全て自分で撮つたもので、ブログに上げたりして楽しんでいる。

『見ていて楽しい』

『幸せになれる』

『癒される』

といった評価が多く、その評価で、みさとも幸せになれることができた。

誰かが笑顔になれる、そんなきっかけになるのなら、自分もも嬉しい。

それにしても、いい写真が撮れたなあと満足していると、ポケットが振動した。

携帯がメールを受信したらしい。

一やつほー！

今、ちょっとといい写真撮れたからさとみにあげるよ。

入道雲です

レイからだつた。

写真が一枚添付してある。ファイルが大きいのか、読み込みに少し時間がかかった。

「わあ・・・」

携帯で撮つたのだろう、画質はさほど良くないが、みさとには、レイが見せたかつた風景がありありと浮かんで見えた。  
大きな入道雲、そして一筋の光が雲の間から差していく、街の中に淡く溶けていくよつた。

まるで、はちみつを垂らしたよつた一枚。

この光を、古代の祖先達は、まるで神の通る道のよつて思つたのだ  
るつ。

とてもわかりやすい表現が、今にも伝わっている。

—『天使の梯子』が出ていますね。

とっても綺麗。

写真をどうもありがとうございます。

返信は速い。

—天使の梯子?

予想通りの返信が来て、みさとはふふ、と笑った。

—雲間から差す光のことです。光のカーテン、綺麗でしょ?  
まるで神の通り道みたいだから、使者の天使を借りて、そういう名前が付きました。

雲の形状には、他にも『風の伯爵婦人』だと、面白い名前がいくらかあります。

—そうなのかー。

結構深いんだなあ。

てか、なんでそんな詳しいの(笑)

—・・・趣味だから

—空以外も詳しいよね?!

…………多趣味なんです

うぐ、と詰まりながら、苦し紛れに逃れる。

本や図鑑を読みあさつたなんて言いたくない。  
が、好きなことならなんでもすぐに覚えられるものなのだ。

——レイがサッカーに詳しいのと、変わらないよ。

——なるほどね。

で、さとみはその幅が凄く広いと（笑）

——まあ、そういうことかな。

クス、と笑つて携帯を閉じ、窓に寄り掛かつて目を閉じる。  
日当たりの良いバスの中を、まだ少しひんやりとした風が走り抜け  
た。

## 天使の梯子（後書き）

空って本当綺麗ですよね。  
個人的に、HABUさんというプロ写真家がオススメ。  
HP是非見てみてください。

## 彼つてやつ、悪くないかも

暖かい日差しの中で、うとうとしかけていたみやとは、今のメールのことを考えて薄く目を開けた。

自分がちょうど写真を撮った直後に、レイから写真つきのメールがきたのは本当に偶然だ。

住んでいる場所も、本州のみさとと、と北海道の彼では海を渡るのに、同じタイミングで同じことをしていたことになる。

しかも、それをわざわざメールしてきた。

そこまで考えて、頬がカツと熱くなる。

以心伝心？違うな。

なんか、波長が合う感じ。同じ時に同じこと考えたり、無理に合わせなくていいのってとっても楽。

メル彼、悪くないかも・・・

なんて考えながら、ほてつてしまつた頬をペシペシと叩き、冷まそうと努力する。

「いよつす

ひょっこりと視界に綾乃が現れた。

「隣いい？」

「あ、う、うん

みやとは慌てて席周辺の荷物を片付けた。

「顔赤くしてびびつしたの

「えつ？！あ、いや、」

声が裏返る。

「もしかして彼氏？！」

あくび。

「・・・なわけないか。みさとだもんねー」

綾乃がけらけらと笑う。

それはどういう意味だ、と苦笑いしながらみさともあはは、と声を出した。

レイは、彼氏とは違うけど、全く違うわけでもない。  
バレたらちよつと困るなあ。

説明できない。

仕方なく、今回は適当に繕つひこにした。

「口差しで、あつくなつただけ。ずっとといるから」

「そかそか」

それで綾乃は興味がなくなつたらしく、雑誌を開いて読みはじめる。  
時々、

「コレかわいくない？！  
みさと似合いでそー」

なんていいながら見せてきていたが、バスが発車する頃には完全に夢の世界を旅し始めていた。

安らかな寝息が聞こえる。

みさとも、まだ冷え切らない額をひんやりしたガラスにおしあて、仮眠することにした。

終点までの距離は、昼寝をするのに充分な時間であった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3753s/>

---

空手紙

2012年1月12日18時48分発行